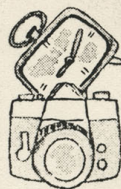


米・中関係の正常化について

— 一つのアジアの見解 —



均衡を失った文明

ゼット機のおかげで今日の世界は非常に小さくなった。殆んど毎日私達の話題になり、いまや米国で一番大きなナショナルスポーツとなったベトナム論争の焦点であるベトナムへも、ニューヨークから二十時間足らずで行けるばかりか、月への旅にまで成功した科学的事実、人類が地理的距離の征服に成功した事を証明しているが、その反面異った国と国、異った文化と文化、異った宗教と宗教そして、異った言葉と言葉の間にある精神的距離は一向に征服されていないばかりか、この精神的時差は時には戦争の原因ともなり、われわれの共存を根本的に脅かしている。

実際問題として、われわれの精神構造は国籍のいかんを問わず、自国の政治的伝統なり文化、宗教、経済的利益に余りにも忠実であり過ぎるため、最も地理的に近い国ですら、ゼット機をもつても達することの出来ない遠い国となつたこの人間性の愚かさからいつ脱皮できるだろうか？ こんな意味でナシヨナリズムは人類の共存を阻

米国・ニューワーク工科大学助教授

姜 光 錫

む最大の敵であると言つたトインビーの言葉は多くの示唆に豊んでいると思う。余りにもナシヨナリスティックであり過ぎたために、狂人のようにふるまったドイツにおいてすら、ブランド首相はナシヨナリズムはドイツにとつて敵であり、ドイツ人はドイツ人であるよりもヨーロッパ人であろうと努めるべきであると言っているが、アメリカの悲劇は、すでに二十五時状態に達したベトナム問題への理解が今ようやくハイヌーン（正午）的時点に達したという事は国家的、民族的または文化的時差によるところが多い。月へあれだけの科学的正確さをもつて宇宙の距離すら征服した国が他国との間にある民族的、文化的距離の征服に完全に失敗しており、このような時差をうめる努力が間違つた方向に浪費されていることは残念である。

なぜ中国は敵なのか？

例えば、ラスク前國務長官は事ある度にヨーロッパにおけるナチ・ドイツの侵略行為を中国のアジアにおける行動に結びつけることによつて、中国は米国にとって敵である」ときめつけているが、アジア

的見地からみて、このラスク見解は全く誇張されたナンセンスである。現在進行中の米・中ワルソー会談が雪どけのような印象を与えているが、米国側の中国に対する態度に根本的变化がない限り、前途は樂觀を許さない。こんな意味でラスクの見解に関連して私は二つの最も基本的な質問を提示したい。

① 本当に中国は敵なんだろうか。もし、そうであるとすれば、中国が敵対行動をとる原因はどこにあるのか？

② 果して米国側に何ら落度がないといえるだろうか？ 米国が中国人の憎悪をかきたてるような行動を取っていないといえるだろうか？

このような質問に答えるという形において、私なりの一アジア的見解を述べてみよう。まず米国内にはアジアの問題を反共、又は親共という白黒の見解からとらえようとする傾向が今なお支配的であるが、アジア問題はそんな白黒の見解だけで理解される性質の問題ではない。

あらゆる意味において、中国問題なりベトナム問題は、東洋対西洋という歴史的全貌を背景にして取らえない限り、真の理解は不可能であるばかりか、例えば、米・中関係を過去の東洋と西洋がどんな形であつたのか、その歴史的背景から切り離して考えることは客観的妥当性をはなだ欠くことになり、独善的または便宜的解釈になる危険性が大きい。

歴史的にいって、西洋諸国の東洋に対する態度は決して「友情ある説得」による接近ではなく、軍事力を先頭にした理不尽な暴力による征服に終止したといえよう。その証拠に、日本を除いて殆どのアジア諸国が百年以上に亘つて西欧諸国の植民地となるか、またはその直接、間接的支配下におかれてきた。米国を含めて西欧諸国は時には過

去を不問にしようという態度を取るが、被害者であるアジア諸国民の西欧に対する将来の態度を考えると、西欧の犯した過去に対して根強い不満があることを見逃してはならないと思う。これは何もアジア人に限つた問題ではなく、もし歴史的な立場が逆になった場合、西欧諸国民もアジア人の感情に似た反応を示すであろうことは決して想像し難いことではない。

百年以上に亘る植民地支配の苦い経験が終つたものとはばかり思つていた矢先に、アメリカがベトナムにおいてフランスの場を取つて変つた時のアジアの失望は大きかった。人類の歴史にかつてなかつた最も物質的に豊かなそして軍事的に最強の国アメリカが、世界で最も貧困な国を相手に軍事力を行使して戦争をしかけたという醜い事実が、反共のための聖戦という口実よりはるかに重みをもっているという事をアメリカは理解していない。この様なアメリカの無理解さをホー・チ・ミンはジョンソン大統領宛の返信の中で静かな怒りをもって抗議している。なんとかして平和交渉への足がかりを求めようとするジョンソン大統領に対して「ベトナムは米国より何千マイルと離れており、われわれベトナム人は今まで米国に対して何ら危害を加えた覚えもないのに、ジュネーヴ協定尊重を宣言しておきながら、その義務に反してあらゆる侵略的軍事行動を続けているではないか」、ときめつたホー・チ・ミンの言葉をかきつるまでもなく、西洋の東洋に対する軍事行動は何もベトナムにはじまつた訳ではない。もちろん、理由こそ異なるかも知れないが、醜い阿片戦争を白人の神から与えられた使命（White man's burden）と正当化した英国、ベトナムを植民地として支配したフランスは「文化的使命（Civilizing Mission）」と

いい、今日アメリカは、ベトナムにおける軍事力の行使を「力の責任」(Responsibilities of power)と放言してはしないが、これら三つの異った表現の中には、力による弱い者いじめという醜い共通の事実があることを見逃してはならない。もし立場が逆になったとしたら英国、フランスそしてアメリカはそんなたわけた事が果していえたであろうか？

このような悲劇的な東洋と西洋のめぐりあいの歴史がそもそもベトナム問題の出発点であり、アメリカの中国周辺における露骨な武力の行使という形をとってなお尾を引いている。かつてソ連がキューバに大陸弾道弾を設置してワシントンを手軽く射程間においたときアメリカは衝撃の余り理性を失いかけた。結局力による対決という形にもちこんで事態を有利に導いたが、今日の中国が丁度キューバ問題に直面した当時のアメリカ以上の危険にさらされているという事実をアメリカは何んと反論できるだろうか？自分がそんな危険に直面したとき、その危険を除去するためなら、力の行使すら辞さないという決意した経験があるなら、なぜ今中国人がそれと同じ様な決意をいだく理由があるという事を理解できないのだろうか？ある意味において今中国は第二次世界大戦前の日本の置かれた立場に共通しているといえよう。

近代中国の歴史はなによりも屈辱の歴史であり、中国のように多数の国によって「輪姦」されたという例もまた珍らしい。中国を中国人の立場からみることによってはじめて中国の行動を理解できるといえよう。十九世紀の中国はある意味においてパブロフの実験に使われた犬の様な立場にあり、中国犬が西欧のパブロフから受けた刺戟は改めようというまでもなく友情ある説得ではなく、屈辱以外のなものでもな

かった。残念ながらこの悲惨な過去を二度と繰返させないという中国の固い決意は正当であるにもかかわらず、近視眼的な反共一点ばりのアメリカ人にはそれが「中国の侵略的態度」と誤解されていることは残念である。これに輪をかけるように米国の一般の新聞論調は、中国は米国の平和共存を望んでいないと必要以上に反中感情を煽っている。例えば、いつかニュー・ステーツマンに発表された英国の記者と周恩来とのインタビューの中で、周恩来は「中国は米国の平和共存を希望しており、過去十年間ワルソーにおける米中会談において米大使にこの意思を伝えていた」といったが、アメリカの新聞は中国が好戦的で平和共存を望んでいない、と盛んに誹謗しているその真意は何か、理解しえない。

米国の対中政策

大体において、米国の対中政策は次のような三段階の理論からなっている。

① 中国の国際的孤立化と封じ込め

② 対話と交渉

③ 米・中関係の正常化

最近のワルソー米中会談が対話と交渉という第二段階に入ったように受け取られているが、実際問題として第一段階の国際的孤立化と封じ込めが必ずしも終わっていない。この政策はかつて共産革命後のソ連にも適用され、遂にソ連の革命が覆えすことのできない事実となったとき、はじめてアメリカはソ連を承認したという前例がそのまま中国にも当はまるといえよう。もちろん、第一段階の政策の根底には、安

な立場を決して甘受しないでしよう」といった。

さき程の英記者とのインタビューの中で、周恩来は中国は米国の平和共存を望んでいるが、米国の武力で中国領土の一部である台湾を軍事的に支配している限り、どうして平和共存が可能だろうか？とはつきりその立場を表明している。台湾問題が長びけば長びくほど、中国にとっては不利であり、米国の利益になることは疑う余地がない。アメリカの露骨な力の干渉によって維持されている「二つの中国」という神話を多くの台湾人は本気になって信じはじめたし、台湾人は中国人ではないし、中国から離れて独立すべきであるとい出した。蒋介石政権への押え切れぬ憤懣が台湾独立運動への発端となったが、本当に独立が実現した場合、米国の軍事協定でも結ばれたら、結局、得をするのは台湾人ではなく、米国の大局的な判断が必要になってくるだろう。

最後に、かつて中国が西欧諸国から力の洗礼を受けているとき、アメリカだけが参加しなかった、というより建国後まもない頃だったので、参加できなかったのであるが、一般的に東洋人はアメリカに対して、非常にロマンチックなイメージを持った理由として、東洋が西欧の植民地となって苦しんでいるとき、アメリカは大英帝国と戦って自由と独立を勝ち取った歴史を、東洋人自身のための教訓として学ぼうとして来た。中国語ではアメリカを「美国」とよんでいる。しかし、いつまでも露骨な力の行使ばかり見せつけられれば、いくら気の長い中国人でもアメリカを美しい国と呼び続けることができるだろうか？

結 論

ワルソー会談の結果は米・中関係を正常化させると言うだけではな

アメリカの国家的利益に反するから中国を承認しないという方針があったが、この第一段階の政策に深入りし過ぎたために、第二段階への転換が非常に困難であり、一部の知識人を除いてアメリカの国民感情はまだ中国を受け入れる準備ができていない。一九六九年三月ニューヨーク市内のホテルで、ラインシャワー前駐日大使が中心となって中国通の教授、政治家などが参加して、米中と中国のこれからの十年というテーマを中心に会合がもたれたが、残念ながら中国人の意見を聞くという配慮が欠け、相手の感情をまるで無視した自己主張だけに終わってしまった。いうまでもなく第一段階の固執は、中国に理性を失わしめ、力には力をもって対決する以外に途はないという教訓を中国に押しつける以外何ら得るところはなく、世界平和のためにも全く危険な政策である。

しかし第二段階の対話が始まったので、必然的に問題となるのは、台湾問題と国連における中国の代表権問題である。第三段階の米中関係の正常化の前途に横たわる二つの問題が第二段階の対話と交渉の中でどのように処理されるだろうか。

私はある著名な歴史の教授と対話中「もし立場が変わってアメリカのある政治家が大統領選に敗れてハワイに逃れ、蒋介石のような立場になって、ハワイを力で統治し、一家の安全を計るため、中共なり、日本と軍事協定などを結んだとしたら、アメリカ人は果たしてどう思うであろうか。また、中国なり日本が国連で二つのアメリカを主張したらアメリカ人は果してサンキューというだろうか」と問いかけたら、教授は非常に困惑したようすで「とんでもない、アメリカ人は絶対に中国なり日本を許さないとしよう。そしてまた、われわれはそん

く世界平和の為にも大きな意義をもっている。ワルソー会談を成功に導く為には、アメリカは根本的に「力の政治」的態度を変えない限り何ら建設的な結果は期待できないであろう。今こそアメリカはその過った大太平洋政策を根本から再検討する必要がある。

もし中国が全太平洋、カリフォルニア沿岸までの線を中国の安全保障地域であると主張した場合、アメリカは絶対に容認しないばかりか「武力」に訴えてでもそのような理不尽な主張に挑戦するであろう。

それと同じように全中国の沿岸を含めて太平洋をアメリカの安全保障地域であるという独善的な「力の政策」を変更しない限り米・中関係の正常化は事実上不可能であるかも知れない。アメリカを含む西歐諸国は過去三世紀に亘ってあくなき力の政治を続けて来た。第二次世界大戦が終った時、軍事的強大国が未開発国に対してタンクを先頭に乗りこんで来るような事はもう事実上終ったものとアジアの知識人は余りにも素朴な期待を持っていた。

もし、中国が軍事的にアメリカに匹敵する立場にあるとしたら、ソ連のチェコスロバキアへの武力干渉を己むを得ないものと暗黙の承認を考えているように、ベトナムへの出兵など恐らく考えもしないだろう。その根底にあるものは何か？ これは余にも「物理的力」を尊敬し「力」の現実にもみ感受性を示すという西歐的知性の破綻をもたらずであろう。あれだけ「物理的距離」の征服に熱心なアメリカが宇宙的距離の征服に成功したが、その反面国内に厳存する人種の距離の征服には余り熱心ではなく、いろんな意味において人種の距離の征服に失敗状態にあるという事は悲しむべき現実である。人類の平和のためには、宇宙への物理的距離の征服よりも異った人種、宗教、文化間

にある距離の征服の方がはるかに大事であり、その意義は計り知れないものがある。

アメリカにおいて「中国は自ら孤立状態を選んで」という考え方が支配的であるがこれは間違っている。なにが中国をこのような状態に追いこんだのだろうか？を考えない限り改善は不可能である。中国の軍事的弱味につけこんで「二つの中国」を平気で唱える事がいかに中国を侮辱し、中国を激怒させているかぐらいは、もし中国がハワイとアメリカは「二つのアメリカ」であると主張した場合、アメリカの怒りがどんなものであるかを想像すれば十分であろう。アメリカに取って理不尽な主張は、中国に取っても同じく理不尽な要求である事を卒直に認め、アジアにおける軍事行動を自制すべきである。

国連における中国の代表権の問題についても、アメリカはまだ中国が国連を必要とする以上に、国連が中国を必要としていると言う事実を無視し続けている。もし立場がかわって中国があらゆる軍事的外交的、経済的立場を利用してアメリカを国連からしめ出した場合、アメリカは果してサンキューと言うだろうか？二十世紀の指導者をもって自負するアメリカに対してまだ十九世紀的軍艦外交を続けていることは、甚だ遺憾な事である。もし中国をして理性を失わしめる破目に追い込むとしたら、その責任はアメリカにあるといえよう。ワルソー会談を新しい東西関係時代を開くという意味においても、「物理的力の基礎の上においてのみ取り引きを有利に導く」という力を過信した外交的態度から、共通の問題である世界平和のためのパートナーとしての参加を求め、中国周辺からの軍事基地を撤退させる事によって誠意を示すべきである。